

木管五重奏と狂言師のための管楽狂言『猿神』 台本

—千葉潤之介教授退職によせて—

久留智之

(愛知県立芸術大学)

The Scenario of Kyôgen Music ‘SALUKAMI’ (Naked Apes and Deities) for Woodwind Quintet and Kyôgen Actor : Giving My Respect to Prof. Jun’nosuke Chiba

Tomoyuki HISATOME

千葉先生、ご定年おめでとうございます。先生には共同論文執筆、古楽器購入のアドバイスや定期演奏会でのVc.パート賛助出演など、公私ともに大変お世話になりました。ここでは祝言に代えて近年の拙作『猿神』（木管五重奏と狂言師のための管楽狂言）の台本を掲載しようと思います。これは先生の古今東西の芸術・芸能についての博学多識ぶりや実践を重視する姿勢に感化され、浅学ながら試みている所謂日本伝統芸能の「語り物」の新たな方向性を探る創作の一つです。

- ・タイトル：管楽狂言『猿神』—木管五重奏と狂言師のための—
- ・作曲・台本：久留 智之
- ・委嘱：アルテ・コンボ木管五重奏団（ArteCombo [仏]）
- ・作曲年：2011年
- ・初演：2011年7月／大分県別府大学文化ホールおよび人吉カルチャーパレス
- ・初演奏者：アルテ・コンボ（木管五重奏）、小笠原匡（和泉流狂言方）
- ・演奏時間：約20分

1. 『猿神』 あらすじ：

人間の祖先である猿の神々が現代の人間界に降臨し、子孫である人間の退化した体躯（毛無しの猿）や彼らには理解出来ないアスファルトの道路などを見て驚き、呆れ、落胆する。人間は何か便利なものを発明するたびに自分たちの機能や能力の大切な何かを失って来た。いま地球に元気がないのは、この人間たちの振舞いが原因であろうと考え、まず人間に再び元気が戻るよう毛生えの祈禱や奏楽を行うのだが、思わぬ結果に…。

2. 伝統の狂言の由来と『猿神』の中での狂言の役割：

辞典によれば、狂言は「室町時代の初期に成立した滑稽を主とする科白劇」であり、「平安時代の猿楽を洗練」したもので、もともとは「神社から興ったもの」ということである。そこで『猿神』では、音楽に「神降ろし」「神遊び」「神上がり」という神楽の様式を用いることとし、それに伴い物語も神と人間のやり取りから文明という考え方を風刺するという内容とした。

狂言には、独特の科白まわしと間の取り方、仕草の重視、擬音の重視、極端に簡素化された舞台装置など長い歴史の中で培われた様式美がある。これらはすべて観客に想像力を喚起するように求める。『猿神』制作にあたり、この様式の力を最大限生かすよう配慮した。音楽には一部宮中で行われている御神楽（神楽歌“星”より『木綿つくる』）が借用されている。

3. 木管五重奏と狂言の融合のアイデア：

狂言は科白劇であるが、狂言師の語り口や発声法は大変ユニークに様式化されたものである。とくにそ

の発声法は、腰を低く構え、あたかも地の底から声が響き上がってくるような強烈な印象を与えるものである。独特の科白まわしや間の取り方なども合わさり、その語り口は私的にはほとんど一種の洗練されたレチタティーヴォのように聴こえてくるのである。これに比べればオペラのレチタティーヴォは、固定されたピッチが定量的なリズムにはめ込まれているため柔軟性を欠いていて、未だ洗練度が低いと言わざるを得ない。融合に際し考えたことは、この発声法と語り口を音楽として表現出来ないかということである。そこで科白を、①ノーマルな語り、②台本（文字）に速度や音量変化などの音楽情報を付加した語り、③スコア上に科白を記した語り、④スコア上に高・中・低のおよその音高とある程度正確なリズムを記した語り、⑤音高もある程度正確に要求する歌に近似した語りというように分類し、科白そのものを音楽としてアンサンブルに組み込むことにした。木管五重奏には、言語がもつ音楽的情報から発想されたフレーズ（音勢・音色情報や微分音、ピッチベンド、多様なアーティキュレーションなどが含まれる）の演奏や自ら語る科白と演奏の瞬時の交代などの高度なテクニックが要求される。

音楽の素材の多くは日本の里神楽を参照し、また猿の表現としてインドネシアのケチャを参考にした。

台本

音楽狂言 『猿神』—木管五重奏と狂言師のための—

Kyôgen Music “SALUKAMI ~The Naked Apes and Deities~” : For Woodwind Quintet and Kyôgen Actor

久留 智之

登場人物

サル神…シテ（狂言方）

神々…アド：木管五重奏団（語りのアンサンブル）

ヒトたち（毛無の裸サル）…会場の方々

M1 登場の音楽 Entry Music てんでんバラバラと入場しながら。（楽譜有り）（譜例参照）

全員 「^{とざいとうざ}東[〜]西。東西、東〜西。」「え〜い！ えい！えいっ！ え〜い！ えい！えいっ！」「降りる！ 降りる！トーオトーオトーオトーオ。ヒュオースーヒ、スーオーヒューヤツ、下る、下る。下る、下る！キャーキャーキャチャキャチャ、チャンギンチャンギンチャーチャーチャーキャ、etc.」（以下次第に口三味線アンサンブル化する。）「降りる、降りる、降りる、降りる。下る、下る、下る、下る。（最後にキメポーズ、見得を切るように）え〜〜〜い！降りた！」

—以下台詞—

サル神（狂言方）「このあたりのサル神でござるツチャツキャ！」

神々一同（木管五重奏全員）「神でござる！」

サル神 「このあたりは、ほんの一万年前までは鬱蒼たる森が広がり、その一億年前までは渺々たる海原であったと覚ゆるが、いまは人間たちがこのようにウジョウジョとたくさんおるツチャワ！」

神々一同 「ウジョウジョとおる！」

サル神 「それにしても人間というのは、ま〜ず卦体な生き物でござるツチャ。」

神々一同 「ま〜ずケツタイ！」「ま〜ずケツタイ！」

サル神 （会場の《赤い…何色でもよい》服を着たヒト《女性》と《黒い…何色でもよい》服を着たヒト《男性》）に向かって）

「やい、やい、そこの《赤い》人間。その姿は何とした？」「アチャーッ！（目を覆うジェスチャーで）」「なにゆえにそのような《赤い》布つきれを体に巻き付けておるのじゃ？」（別の方を見て）「ん？ そこの《黒い》オス人間も、足の先っばから頭のでっぺんまで、まあいろいろな物を巻き付けて。いったいその姿は何とした？」

「ん…？ ん？ ん？ ん？」（accel. & cresc. で）

「こはいかに！」(両目を覆って)

神々一同 「いかがした？」

サル神 (小声で神たちに向かって)「毛が無い…」

神々一同 「毛が無い？」(台詞後会場を見つめる。間。)

サル神 (早口に)「此奴らは体に毛が生えておらん！」

神々一同 「オ～！」

神 (Cl) 「お気の毒！」

神 (Cor) 「恥ずかし～！」

神 (Ob) 「可哀想！」

神 (Bsn) 「ぶざま！」

神 (Fl) 「ま～ずケツタイ！」

神々一同 「ま～ずケツタイ！」

サル神 「奇妙奇天烈, 毛無しのサル。奇天烈奇妙, 裸猿。ま～ずケツタイ。まずケツタイ。ちょっと見ぬ間に哀れな姿。ああ, ご同情, ご同情。ほんの 100 万年前までは, 毛がフサフサであったのに。」

神々一同 「毛がフサフサであったのに！」

M2 裸猿の音楽 Naked Apes (以下譜面有り)

サル神 「奇妙奇天烈, 毛無しのサル。」

神々一同 「奇天烈奇妙, 裸猿。」

サル神 「いやはやなんとも哀れな姿。ま～ずケツタイ。まずケツタイ。」

神々一同 「ま～ずケツタイ。まずケツタイ。」(リフレイン後音楽へ)

—以下音楽。曲中適宜「掛け声」有り。ラストのキメは全員で「ケツタイ！」—

(以下台詞に戻る。)

サル神 「ああ, ご同情, ご同情。ほんの 100 万年前までは, 毛がフサフサであったのに。もはや布きれ無しでは生きられぬツチャ。元気がないのは毛の無いせいか。これでは絶滅まであと僅か。ほんにご同情…」
全員 「申し上げます～。」(深々と一礼しながら。)

—間—

サル神 「ま～ずケツタイ！」

神 (Ob) 「いかがした？」

サル神 「いやはや人間というのは卦体なことをする。どこもかしこもヘンテコな物を被せては, 毛が生えぬよう丸裸にしてしまうという誠に奇妙な習性を持つ動物とみゆるツチャ。布つきれを身体に巻きつけては自らを毛無の裸にし, 地面にはアスファルトを被せて草も樹も生えぬようノッペリ, まっ黒の丸裸にしてしまうツチャ。」

神々 (女) 「ノッペリ！」

神々 (男) 「まっ黒！」

神々一同 「丸裸！」

サル神 「あれでは地面が息が出来ぬツチャ。人間以外には迷惑至極! まずもって不可解千万！」

神々 (Cl) 「人間て, わけわかんない！」

神々 (Ob) 「人間て, まじヤバイ！」

神々 (Cor) 「ちょっとヘンタイなんじゃない！」

神々 (Bsn) 「もう～絶望的！」(上を向き片手で目を覆いながら)

神々 (Fl) 「毛を返せ～！」(アジテーション風にコブシを突き上げて)

神々 (Cl) 「ワイセツ！」

神々 (Cor) 「ウヒャ～, ま～ずケツタイ！」

神々一同 「ウヒャヒャヒャ…, ま～ずケツタイ！」

全員 「ケツタイ！」(キメ)

サル神 「しかし, みどもは合点がいった。」

神々一同 「合点がいったか。」

サル神 「あ～、合点がいった。近頃地上に元気がないのは、この毛無の猿どもの奇妙な振る舞いのせいだッ
チャッキヤ！ そのせいで人間どもは、自らも軟弱で情けない姿に成り果てたッチャ。が、元はといえば
我が同胞。このまま、放ってもおけぬッキヤ。ここはひとつこのサル神が一肌脱いで、人間どもにまた再
びフサフサと毛が生え、元気がでよう毛生えの祈祷をいたすゆえ、皆の者、いざ鳴り物で囃してたもれ！」
神々一同 「心得た！」

**M3 念仏踊り（毛生え祈祷の音楽と舞） Chanting a Prayer Dance : The Prayer Music and Dance for
Hair Restore + 台詞 + 掛け声 + ゼスチャー（以下楽譜有り）**

サル神 「裸のサルが減びぬように毛生えの祈祷を奉らん。いざ、え～い！ えい！ えいっ！ やっとな！
それっ！ ひよっ！ ひよっ！ ひよっ！」（両手を合わせて上方に突き上げるゼスチャー）

神々（それぞれに）「それっ！ ひよっ！ ひよっ！ ひよっ！ ひよっ！」

—以下音楽&舞—

サル神 「毛のないサルに、毛よ生えろ！」

神々一同 「それっ！ ひよんひやらひゅっひゅっ。も～ぞもぞ！」

サル神 「ツルツルスベスベ、みっともない！」

神々一同 「それっ！ ひよんひやらひゅっひゅっ。も～ぞもぞ！」

サル神 「裸のサルは気付いちやおらぬか。」

神々（女性陣）「便利の裏に」

神々（男性陣）「退化有り。」

サル神 「毛のないサルは、気付かぬふりか。」

神々&サル神 「見ざる。」（ジェスチャー全員で）

神々&サル神 「聞かざる。」(FI&CIは「見ざる」のままのジェスチャーで。その他は全員「聞かざる」のジェ
スチャーで。)

神々&サル神 「言～わざる。」(FI&CIは「見ざる」のままのジェスチャー、Bsn&Corは「聞かざる」の
ままのジェスチャーで。サル神とObは「言わざる」のジェスチャーで。)

神々一同 「そりゃっ！」

サル神 「進歩の後ろに災い有り。元気がないのは、便利のせいッチャ。」

神 (FI) 「便利、べ～んりと勘違い。」

神々一同 「あ～、勘違い。」

神々（それぞれにリフレインして）「それっ！ ひよんひやらひゅっひゅっ。も～ぞもぞ！」

—音楽 diminuendo e pp—

サル神 「おやっ？ おやおやっ？」

神々一同 「ん～？ いかがした？」

サル神 「お～やおやっ？」

神々一同 「おやおやっ？」

サル神 「おやおやっ？」

神々（それぞれに）「オヤオヤ、オヤオヤ…。」（以下、口三味線アンサンブルでひと盛り上げる。）

神 (FI) 「あら不思議。何やら地面が」

神々 (FI 以外の全員で) 「も～ぞもぞ。」

神 (FI) 「草の芽が出る。」

神々 (FI 以外の全員で) 「も～ぞもぞ。」

神 (FI) 「木の芽も芽吹く。」

神々 (FI 以外の全員で) 「ひよんひやらひゅっ！」

神たち（それぞれにリフレインして）「それっ！ ひよんひやらひゅっひゅっ。も～ぞもぞ！」

—音楽 cresc.—

（以下台詞に戻る。）

サル神 「ありゃありゃ、どうも舞を間違えたらしいッチャ。」

神 (Cor) 「何やってまんねん！」

サル神 「毛生えのはずが木の芽が吹いたツキヤ。」

神 (Ob) 「ええ加減にせいや！」

サル神 「キヤーチャキヤチャキヤチャキヤチャ！良いではないか。これで五穀豊穡は間違いなしッキヤ。きっとそのうちに人間の体にも毛がフサフサと戻って来るであろうツチャ。さすれば裸のサルも精力ピンピン、しばらくは子孫繁栄というもの。まずは目出度し。」

神 (Ob&Cor) (合いの手) 「イヨッ！」

神々一同 「目出度しや。目出度しや。」(♪)

全員 「お目出度うございます～！」

サル神 「笑い、歌い、思いやり。嘆き、悲しみ、神に祈る。五十万年昔から祈りを知るは人間のみ。卦体なサルだが憎めぬ奴ら。見慣れればなかなか愛嬌もある。どれ、天に昇り帰る前に此奴らとともに遊んでゆかん。汝も神ぞや 遊べ遊べ。 君も神ぞや 遊べ遊べ。さあ、神楽を囃せ、囃せ！」

M4- i 神楽 Music for Deities (『神楽歌』星より「木綿つくる」: 語り歌と音楽/神楽囃子風 (チャンチキ等打ち物付), 本方=狂言方, 末方=木管五重奏)

本方 「^{もとかた}木綿^{ゆふ}作る ^{しな}科の原に や 朝尋ね 朝尋ね 朝尋ね や」

末方 「^{すまかた}朝尋ね ^{まし}汝も神ぞ や 遊べ遊べ 遊べ遊べ 遊べ遊べ」

本方 「朝尋ね ^{きみ}君も神ぞ」

末方 「汝も神ぞ」

本方 「君も神ぞ」

末方 「汝も神ぞ」

本方 「君も神ぞ や 遊べ遊べ 遊べ遊べ 遊べ遊べ」

末方 「遊べ遊べ 遊べ遊べ 汝も神ぞ 遊べ遊べ 遊べ遊べ 遊べ遊べ」

(ゆふつくる しなののはらに あさたづね ましもかみぞや きみもかみぞや)

M4- ii 神上がりの音楽 Deities' Ascending Music (神秘的な音楽。台詞と同時進行)

サル神 「さあ、夜が明ける。まずは高天原にそろりそろりと昇り帰らん。」

神々一同 「一段とようござろう。」

サル神 「木々よ、さやげ。風よ、吹け。」

神々(それぞれに) 「ビューさやさやさやさや…。昇る、昇る。ビューざわざわ…。上がる、上がる。Etc.」(この部分口三味線化し *fino alla fine*)

サル神 「また、神々は上がりけり～」

—音楽次第にクローズアップ—

—終わり—

管楽狂言『猿神』
Kyôgen Music "The Deities of Ape"

1. Entry Music. 登場の音楽

Senza Tempo (Tutti in the wing of stage) 東西 東西
 「Tozai, Tô-Zai~, Tozai, Tô-zai~」

Lines
 Kyôgen
 Rattle
 Small Chinese gong

Piccolo
 Oboe
 Piccolo Clarinet in E_b

Horn in F
 Bassoon

mf < *f* *segno ad lib.* *f* *molto Vib. (noisy sound)* *simile.* *rapid Vib.* *molto Vib. (noisy sound)* *simile.* *rapid Vib.* *molto Vib. (noisy sound)* *simile.* *rapid Vib.*

♩ = ca. 48
as a rumble of the ground

cf. (All notes are written in actual sound except for Piccolo. Piccolo part in written in One Octave lower than actual sound.)

全員足を踏み鳴らし、旋回しながら派手に登場。
 バラバラに (Players onry loudly, stomping & uhirling separately)

5
 Lines
 Kyôgen
 Rattle
 Ch. gong

「E~!! E!! E!! / 「O~riru, Oriru, Oriru, Oriru」 / 「Ku~daru, Kudaru, Kudaru, Kudaru」 / 「Kya- Cha-, Kya- Cha-,
 E~!! E!! E!!」 / 「To-o, Toô, Toô, Toô」 / 「Hyû-o-s-hi, Su-o-hyu-ya!」 / 「Kya- Cha-, Kya- Cha-,
 「え~い! えいっ! えいっ!」 「ト〜オ...」 「キヤ〜チャ〜キヤ〜チャ〜」

accel *accel* (Like a ape)
stac. *molto* *repeat ad lib.*

♩ = ca. 60 伸縮して

Picc.
 Narrate (Like a Kyôgen actor) (Like a ape) *repeat ad lib.*

Ob.
 «E~!! E!! E!! / 「Kya- Cha-, Kya- Cha-,
 E~!! E!! E!!」 / 「Kya- Cha-, Kya- Cha-」 *repeat ad lib.*

elastic *♩ = ca. 60* *stac.* *molto* *stac.*

E_b Cl.
 Narrate (Like a Kyôgen actor) (Like a ape) *repeat ad lib.*

Hn.
 x2 (Like a ape) (Like a Kyôgen actor) *repeat x4*
 「E~!! E!! E!! / 「Kya- Cha-, Kya- Cha-,
 E~!! E!! E!!」 / 「Kya- Cha-, Kya- Cha-」 *repeat x4*

Bsn.
 x2 (Like a ape) (Like a Kyôgen actor) *repeat x4*
 「Kya- Cha-, Kya- Cha-,
 Kya- Cha-, Kya- Cha-」 / 「E~!! E!! E!!
 E~!! E!! E!!」 *repeat x4*

f *accel.* *mp sfz cresc. sfz* *mp sfz cresc. sfz*

♩ = ca. 60 → accel.

Hr. & Bsn. synchronize sempre.